



東京都中央区の晴海地区。

タワーマンションや高層ビルが林立する一角に、黎明公園がある。4月中旬の日曜の朝、おそろいのピスを着た老若男女のボランティアが続々と集まってきた。公園の芝生を維持管理するNPO法人「育てる芝生 イキシアパークプロジェクト」のメンバーらだ。

「久しぶりだね」。代表の尾木和子さんが笑顔で迎える。それぞれ班に分かれて作業に入り、芝刈り機は専用の機械で芝生を35センチの長さに刈っていく。雑草は専用の道具で雑草を抜いてバケツに集める。作業を終えると、集まった靴を脱ぎ、芝生の上にゴロンとおむけに。芝の匂いや感触を体全体で感じる。

伊藤実佳さん(42)は昨秋から娘2人と参加する。「娘が歩く練習をした芝生なので思い入れがある。いつか恩返ししたいと思ってた。交流したり、芝生について学んだりするのが楽しい」と話す。

尾木さんが2013年に活動を始め、22年にNPO法人を設立した。「季節によって芝の長さを変えるなど手入れは奥が深い。みんなで話し合っていていくのが大人も楽しい」と尾木さん。

都心部では人間関係が希薄になりがちだが、尾木さんは「誰でも参加可能で、できる

地域コミュニティ育つ契機

ことをすればいいので緩やかなコミュニティになっている。芝生育ては地域育て、を合言葉にしている」と話す。公園ボランティアをサポートする一般社団法人「みんなの公園愛護会」(東京)代表理事の柁田里佳さん(46)は「ボランティアは身近な公園で気軽に関わって親子一緒にできる。遊ぶだけでなく、一歩踏み込んで育てる側に回ると楽しさがグッと広がります。より積極的に活動する団体も出てきた」と話す。

少子高齢化が進み、公園ボランティアの団体は、担い手の確保が課題になっている。横浜市港北区の師岡打越第

三公園では愛護会が若いファミリー世代に代わり、3世代で花壇作りに取り組み。約40年前から活動していたが、高齢化が進み、参加者も減っていた。10年代半ば以降、若い世代が地域に引っ越してきたのを機に前会長の永信枝さん(83)が勧誘し、現会長の影山泰津代さん(44)や寺田有梨さん(37)らが入会し、引き継いだ。以降、若い世代に興味をもってもらうと、SNSを使って参加を呼びかけている。

若いメンバーらは花壇の手入れを少なくしながら、より自然な風景にしようと奮闘中だ。4月下旬には多年草のセージなどの苗を植える作業が



花の苗を植える愛護会のメンバーら(横浜市の師岡打越第三公園で)

行われた。寺田さんは「花を選んだりするのが楽しくてのめり込んでいます。道行く人に足を止めてもらえる公園に

「担い手不足」多く
「みんなの公園愛護会」が人口5万人以上の基礎自治体に昨年行った調査(回答率64・8%)では、地域住民が公園の維持管理に関わる自治体は95・6%。4万684か所

ボランティア 芝生、花壇手入れ



芝刈り機を使って芝を刈る地域住民ら(東京都中央区の黎明公園で)＝三浦邦彦撮影

くらし 家庭

「当たり前」だが面白い

「デスフィニーって、運の前で息を止めると呼吸が命だと思」。「笑って」。「できなくなってしまう」。

「だ」と歌」という伝統がある。現代では奥村晃作さんの作品が知られる。次々に走り過ぎ行く自動車の運転する人みな前を向く。

60代男性。20代の息子と就職活動について考える方が合います。工学系の大学院生の息子は来春入社に向けて就活中ですが、これまで学んだ分野と全く異なるエンターテインメント系の業種を志望しています。

就活中の息子 専攻と違う志望

ただ、人間的にはメンタルが強いわけではなく、交友関係が広いタイプでもありません。楽器の演奏や歌など音楽活動の経験もなく、ライブに時々行く程度です。ライブで癒やされたからか、普通の会社員として働くことに苦痛を感じるのか、理由ははっきりしません。

未経験のエンタメ系以外の業界も視野に入られて就職活動をするように勧めても、息子の志望は変わりません。(大阪・U男)

人生案内

尾木 直樹
(教育評論家)

息子の就職活動に不安を抱えておられるようです。親心もわからなくはせつかく大学院まで進ん